行政視察報告書　　野々山　雄一郎

日程	平成29年2月1日（水）～2月3日（金）
視察先・視察内容	①福井県坂井市　　三国湊町家活用プロジェクトについて ②福井県小浜市　　食のまちづくりについて ③京都府舞鶴市　　歴史を活かしたまちづくり施策について

①2月1日　福井県坂井市　三国湊町家活用プロジェクトについて

福井県坂井市概要　・人口90,300人・人工増加率マイナス1.75%・生産年齢人口比率61.74%
坂井町、三国町、丸岡町、春江町が属した「坂井郡」の名称を考慮し公募にて
坂井市となる。

三国町の歴史　中世から歴史を持ち、商業の活発化とともに発展。現在の市街地の外観は
江戸初期にできあがった。「北国七湊」のひとつとして反映したが、
明治中期以降の鉄道開通とともに港湾機能が低下し、経済力も衰退した。
大正に入り、商港から漁港へ転換。
戦災・自然災害にあわなかったため、湊町の繁栄を偲ばせる町並み景観と
多くの歴史文化遺産が残っている。

視察内容　（ふるさと創造プロジェクト）
「三国湊町家活用プロジェクト」
・歴史的建築物を含めた町並み整備

町家などの空き家を保存･改修・活用
に当たって、建物の風情を活かし、
歴史・町並・歴史文化遺産の保全と
継承を目指している。
その改修した空き家はテナントとして
貸し出している。
来訪者や住民が想像力を膨らまし、
散策できるような拠点づくりやソフト整備を行っている。
空き家を減らし、町に住む人や町で活動する人を増やしていき、三国湊の未来
を作る施策として取り組まれている。

平成24年に一般社団法人三國會所を設立。三国商工会、観光協会を中心の
まちづくり推進協議会が母体になり15年以上まちづくり活動を実施。
その団体が三國會所となり、プロジェクトの運営主体を担っている。

活用物件　元「三國湊座奥の倉庫と下新公園」

「マチノクラ」と「マチノニワ」に
活用。三國湊の海運と文学の
伝承と町歩きの拠点としての施設。

三國湊レトロを味わう玄関口。
1Fの大スクリーンと2Fのムービー
など展示物だけでなく玄関口として
こじんまりとした充実の空間。

活用物件と状況

「マチノクラ」を中心に500m圏内の道路沿いに
活用物件が点在する。アスファルト道路の色を変えて
町歩きにメイン通りとして差別化されている。
古民家は築100年以上の物件も多数あり、テナントだけ
でなく、住人のいる家も含めてのまちづくりを推進。
運営主体の三國會所はプロジェクト終了後も改修・町家
バンクの運営を持続的に行っている。

成果として観光客が17000人増（前年比126%）、6名の移住定住者、東京大学と共同研究による
「三国まちづくりビジョン」が策定された。今後も空き家の利活用を通じ、まちの課題解決をして、
まちづくりに取り組んでいく。

所感

三國會所が入居者と家主との仲介・管理を行っているが、構成メンバーに
商工会・観光連盟などの各種団体が組織として運営主体になり、まちづくりに
取り組むことは、今後の本市のまちづくり運営団体形成の参考になった。
本市もリノベーションまちづくりを推進しているが、空き家の利活用だけでなく
イメージを統一したまちづくりも考えるべきかと。
文化財・お祭り・寺社仏閣を組み込ませたまちづくりは本市とも通じる所があり
参考になる事例である。
観光ポイントでその場所の昔の写真が見れる「拡張現実」のアプリケーション等
ICTによるサポートは必要と感じました。もっと認知されるためには、
ウェブサイトを立ち上げたり、媒体を通じた発信も必要。
歩く・歩けるまちづくりは本市でも重要な要素のひとつである。
歩くのが楽しくなるリバーフロント計画のソフト面での参考事例のひとつとし、
本市のまちづくりに取り組んでいければと。

まちづくりにはやはり市民の参加が不可欠なので、本市でも
三國會所のような運営団体の結成を目指し、市民のための
まちづくりを市民の手で作っていく必要がある。
岡崎市の観光資源を活かし、歩くことが楽しくなるまちづくり、
ブラブラと歩きたくなるまちづくりを推進していきたい。

まずは38万人の岡崎市民が歩きたくなるまち
を目指し、歩く人にあふれるまちを作る。
まずはそこに住む住民の方々のまちを思う
熱い気持ちが大切であり、まちづくりに
参加する市民が多ければ多いほど
本市の観光プロジェクトは成功に向かうと
感じた。

②2月2日　福井県小浜市　食のまちづくりについて

福井県小浜市概要　・人口29673人・人口増加率マイナス2.85%・生産年齢人口比率58.22%
若狭塗箸（生産量全国シェア80%）
食の歴史が濃く食育文化都市を宣言している。
市街地西部には重要伝統的構造物群保存地区に選定された町並がある。

小浜市の歴史　暖流と寒流がぶつかる良好な漁場に面しており、飛鳥・奈良時代には
調停に食材を献上し、伊勢志摩・淡路とともに「御食国」とよばれていた。
現在も豊富な食材と多彩な食文化が引き継がれている。
また京都への「鯖街道」の町並みや祭礼などを含め日本遺産第一号の
認定を受けている。

視察内容　（いきいきまちづくり事業）
2001年「食のまちづくり条例」の制定
2005年小浜市食のまちづくり基本計画
12ある各地区単位で、まちづくり委員会
を組織化し、各地区の振興計画をまとめ、
食のまちづくりの基本計画を制定した。
「食のまちづくり条例」では推進のために
「産業の振興」「環境保全」「福祉および健康の増進」「教育および伝承」
「観光および交流」「安全で安心な食のまちづくり」の6つの分野に分類。
各地区の実践活動は年々活発化し、各地区様々な取組みが行われてきた。
森や海などの環境を守る活動、伝統料理の継承・復活、水を活かした地酒等
の地区の特色を活かし、市の職員は裏方に徹し、市民がまちづくりに参加。

食文化ミュージアム　2003年9月完成
「御食国若狭おばま食文化館」は食のミュージアムとキッチンスタジアムの
コーナーで小浜市が推進する食育の拠点であり、温浴施設や伝統工芸工房、
交流広場、マリンデッキ等、観光スポットの
ひとつになっている。

市直営のレストランや駅弁に地元の
食材を使い、地元の伝統料理を提供。
観光客だけではなく、市民が何度も
訪れる憩いの場である。

小浜食文化だけでなく、日本の食文化も
知ることができる展示も行っている。

食育の推進

「御食国若狭おばま食文化館」内のキッチンスタジオで行われる料理教室「キッズキッチン」では就学前の園児が対象の講座がある。
調理補助にはキッズサポーターとして30歳代中心の主婦が担い、包丁などの器具の使い方、野菜の名前や切り方などを教わる。
「キッズキッチン」は料理を教えることを目的とした子ども料理教室ではなく、料理を人間教育の場として子どもの能力を引き出す目的がある。
事実、参加した子ども達は料理ができた達成感を感じ自信持つことができ、好き嫌いがなくなったり、家庭でお手伝いをするようになっている。
体験を通じて、親も「食」によって子ども達の成長を感じている。
小中学生対象の「ジュニアキッチン」、2～3歳対象の「ベビーキッチン」等も開催している。「キッズキッチン」は市内年長児に義務食育として基礎編は無償で行っている。
たくさんのボランティアスタッフがスタジオを委託運営し、市民がつくる市民のための食育の場が、現在では県外からの参加者も増えている。
また学校給食では自校式ではあるが、地区ごとの農家の生産物を使用し、地産地消以外に、顔の見える生産者への感謝の気持ちも育てている。
地区ごとの計画で農家のレストラン、海のレストランといった六次産業にも取り組んでいる。高校では「スポーツ栄養学講座」、高齢者には「生涯食育」を目的としたイベントも開催し、すべての市民が食育環境の元にいる。
食の専門都市として、食育ツアーを引き受けており、気軽な食育旅行から食の教育旅行の企画も手ぶらで参加できるようになっている。
様々な取組みの中でキッチンスタジオの稼働率は80%を超えている。
「義務食育」として、教育委員会と連携し総合学習の一環として、また家庭科の授業内容に組み込まれいる。内容に関しては、各学校に一任し地区ごとの特色のある食育を実践している。

所感

小浜市では海水浴とお寺めぐりが観光の主を担ってきたが、時代の流れで観光客は激減。あらたに食の観光地としての取組みで観光客は増加している。
食を「食育」だけでなく「観光資源」としてのPRは、本市においても八丁味噌等で行っている。現在は民間の施設訪問ではあるが、ミュージアムでの食の展示も本市にも歴史食を始めとするたくさんの食の「観光資源」は存在する。
本市の第三次岡崎食育推進計画は客観的に見て優れてはいるが、市民が作り出す食育の取組みが弱いようにみえる。
井田小学校での校庭の一部で米を作るなどの地域のつながりをもっての食育は子ども達や親達にも好評であるという事実からも、栽培体験を通じての食育は効果的であると考える。
本市の基本方針①健康な「からだ」を育む食育の推進　②岡崎の「こころ」で育む食育の推進　③「ひと」とのつながりで育む食育の推進　　を元に市民の参加を呼びかけ、本市ならではの食育を目指していきたい。
本市では2016年には食育メッセが開催され、市民の熱が冷めないうちに、次なる取組みへ進めていきたい。2017年は野菜摂取量を270gを目標数値に掲げているので、市民農園や地域農園や家庭菜園関連の取組みを強化し、体験して学ぶ食育の実践をすべきであると考える。

小浜市では食の取組みのムービー公開をQRコードの読み取りで手軽に行え、町歩きお散歩ナビといったスマホのアプリなど印刷物だけでなくICTを活用した取組みは本市でもさらに進めていきたいと考える。
情報発信だけでなく、本市の健康マイレージ登録者・まめチャレンジの参加者の増加にもつながってくるかと思われる。

本市の食育の環プロジェクトを基本にそれぞれの立場で互いに協働して関係者の環とライフステージの環を確立し、推進していくことが最も重要であると再度認識した。

③2月3日　京都府舞鶴市　歴史を活かしたまちづくり施策について

京都府舞鶴市概要　・人口86024人・人口増加率マイナス2.03%・生産年齢人口比率59．71%
肉じゃが発祥の地
舞鶴港からロシア・韓国・中国を結ぶ定期航路があり、東アジア地域との経済交流を推進。
旧海軍基地の歴史を持つ東舞鶴地域と戦国時代城下町の歴史を持つ西舞鶴地域で同市ながら地域特色がかなり異なる。

舞鶴市の歴史

東舞鶴　明治34年海軍鎮守府開庁に伴い、軍港都市として発展。現在、海上自衛隊舞鶴地方総監部・第三護衛隊群・第23航空隊・舞鶴警備隊・舞鶴教育隊が所在している。

西舞鶴　戦国武将　細川幽斎が築いた田辺城城下町。
江戸時代から北前船の寄港地として発展した古くからの湊町。
大商人が多く居住し、公益拠点となっていた。

視察内容
東舞鶴　ブランドイメージである「赤れんが」「海・港」を最大限に活かす観光ブランド戦略の推進。観光拠点である「赤れんがパーク」を中心に、隣接する海上自衛隊施設との連携・調和を図り、まちづくりに取り組む。
市の職員有志の自主的な取組みが導いた行政による赤れんが倉庫活用の取組みであり、既存物を活かし、地域の人々の景観まちづくりに対する意識の啓発を促せた。ライトアップ等無理のない取組みから始め、市民の関心が高まり現在に至る。
市の職員と市民の協働の「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」、赤れんが活用の全国の団体と「赤れんがネットワーク」を結成したり、中高生中心での「赤れんがロード」の発掘、民間企業所有の赤れんが倉庫が市に無償譲渡後「保存活用研究会」等、行政・市民・企業が一体になりまちづくりに取り組んできた。

「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」はNPO法人となり多彩な活動を運営し、幅広い取組みが可能になった。博物館・市政記念館・知恵を育む智恵蔵・工房・ホール・広場ロードなどの施設とホールや広場・ロードを利用した賑わい創出にむけた取組も多数行われている。施設来場者は平成23年10.4万人から平成27年には39.9万人と右肩上がりの増加。施設利用も平成25年42.2%から平成26年には53.4%と増加している。またパーク西側の海上自衛隊施設の見学者数も平成23年から現在、増加を続けている。周辺の整備も計画的に行われている。
また映画のロケ地として数々の映画・テレビ番組・写真集などに町並みが採用されている。

視察内容
西舞鶴

城下町文化を活かしたまちづくりとして、田辺城跡周辺のまちなかへの引き込みを目的とし、歴史資源を回遊できる道路「歴史のみち」を推進中。
田辺城まつり・芸屋台の復活など取組みを行い、歴史的な町並みの残る丹波通りにおいて例祭にあわせて通りに面する各戸にのれん、立て看板や花灯籠をの設置を取り組んでいる。
「歴史のみち」整備では道路中央と道路端部で舗装パターンを変えたり、街灯は回遊性を損なわない統一したデザイン、案内サイン・誘導サイン・説明サインに関しても城下町文化を漂わせ、回遊し歩けるまちづくりを取り組んでいる。

芸屋台に関しては、市民・観光客から普段から見ることのできる収納を推進している。
道路に関しては、アスファルト舗装の際、加熱時に型押しし着色材を塗布するなどの工法を採用などの工夫がみられた。
3000人クラスの大型クルーズ船が発着するが、現在は8割以上は舞鶴に滞在せず京阪神へ向かう観光客がほとんどである。

所感

高齢化率30%を超え、人口年間800人減少している現状を受け止め、高速道路ネットワークの完成による交流人口の増加を目指すまちづくりがなされている。
また若者が流出してしまうの仕方ないとしながら、若者達が舞鶴に愛着を持ち、外から舞鶴の自慢をしてくれるような地元の歴史をしっかり教えていく事が重要と言われていた。まちづくりを計画する当初は市民の理解は薄く、盛り上がりにかけていたらしいが、段階を経て徐々に計画を進めて現在にいたる。
本市も住んでよし、働いてよし、訪れてよしのまちづくりに取り組んでいる。
幸い本市はまだ人口が増え続けている恵まれた現状もあり、現在「歴史」「川」を最大限に活かしたまちづくりを推進している。
PRをしっかり行い、市民の参加を促し、交流人口の増加を目指すことが必要であると考える。映画・ドラマのロケ地となる観光資源をアピールすることも積極的に取り組んでいくべきかと。
舞鶴市でもそうだが、市民一人一人が自慢できる岡崎市のまちづくりのためにもっともっと地元を知ってもらう機会を増やし、取り組んでいきたい。

そもそも本市は多数の観光資源がありながら、最大限生かしきれてないといった意見がある。非常に住みやすいまちであるが故、観光に対して消極的な市民も多かったと思われる。
言葉を変えれば、まちおこしの必要がない恵まれた市である。
市民の岡崎市に対する熱い思いを掘り起こし、まちづくりをしていくことが重要であることを認識した。行政・民間・市民が一体となった観光まちづくりは強固なものに出来上がる。
本市のリバーフロント計画においても中央緑道と籠田公園の展開の仕方が鍵となると考え、市民が参加し市民が一体となれるよう取り組む事が必要。
市民の観光意識を高めるには、まずは自分らが楽しめるまちづくりをして、それを外部に市民の方から発信していくまちづくりを推進していくことを第一と考えるべきである。
歴史・自然環境・食など観光資源は豊富、また38万人といった人口、さらに近隣からの交流人口も合わせれば、ネオパーサ利用の人数が示すとおり、無限の可能性を秘めた岡崎市である。
宿泊施設が少ないのは否めないが、まずは市民の方々が楽しめる、市民のためのまちづくりから進めていけたらと感じた。
「まちを誇り　人が楽しむ　新・おかざき再発見」の基本理念をもって、岡崎市のまちづくり施策に取り組み、宿泊施設誘致やスポーツでのまちづくりも含め様々な視点から提案し協議し、岡崎市を観光都市へ発展させていきたいと感じた。100周年事業で繋がった市民の環を継続し、さらなる市民の環を広げていきたい。